

ドアが開くまで席に座ってお待ちくださいとバスの運転手がハンズフリーマイクでアナウンスする。その直後にバスが大きく揺れて停まった。

朝七時台の路線バスの車内は通勤客で混みあっている。ブザーの音と同時にドアが開くと佐也子が立っている前で座っていた女性が立ち上がり降りていった。空いた席を見下ろすと、隅の方にキャンバス地の黒いトートバッグが忘れられていた。降車口を見ると丁度降りていく姿が見えた。反射的にトートバッグを掴むと引っ張り上げた。持ち重りのするそれを両手で持ってバスを降りた。

女性はバス停から十メートルほど先を歩いていた。髪をシニヨンにまとめ、紺色のジャケットにベージュのパンツで靴は細いヒールのパンプスを履いている。身長があるので歩くのが早く、何度も呼びかけたが声が小さいのか自分に言われていると思わないのか気づいてくれない。その間にも彼女との距離は広がる一方だった。佐也子は何年ぶりかで走り出した。といっても手足をバタつかせるだけで歩くより少し早いただけだった。すみません、すみませんと言いつける。自分は何で謝っているんだろうかと思いつつも彼女の後ろまでたどり着いた。

「これ、忘れてましたよ」と肩で息をしながら言った

振り向いた彼女はまず佐也子の顔を見、次に佐也子が持っている黒いトートバッグを見て驚いたようだった。それでも彼女は強張ったままで動かないため、佐也子はさらに一歩前にでて、彼女の手元にトートバッグを近づけた。

彼女はバッグを受け取ると息を吐くように「す、すみません」と謝った。もつと何か言うのだろうと待っていたが彼女は佐也子の顔をじっと見たまま何も言わなかった。ちよつと変わった人なのかなと疑いつつも渡せてよかったと思った。

「じゃあ」

相変わらず固まったままの彼女をその場に置いて、もう一度バスに乗るためバス停に戻った。

更衣室のドアを開けると、ほとんどみんな出勤していて着替えているところだった。佐也子はこの人混みが苦手ですし早めに出社しているのだが今朝は仕方がない。入口のテーブルにあるタブレットを操作してから自分のロッカーに向かった。

「今日は遅かったわね」

すでにライトブルーの制服に着替えているチームリーダーの小嶋に声をかけられた。

「ええ、ちよつと」

佐也子は曖昧な返事でごまかすと、彼女の隣のロッカーに鍵を差しこんだ。

「なに？ 昨日夜遅くまで飲んだの？」

小嶋は佐也子が一年前にこのホテルの客室清掃の職場に来たときからリーダーを務めていて、みんなに集団行動させる人だった。昼食はもちろんのこと、勤務後にカフェに行った、月に一、二回は食事会に誘ってきた。佐也子はそれらをやんわりと拒否しつづけたせいで、当たりがきつくなっていると感じている。

「飲みませんよ。居酒屋で仕事してるんですから」

前職の設備会社の事務職を定年まで勤めたが、独り身で退職金も少なく、年金受給まで数年は働かなくては生活ができないのでこの居酒屋のダブルワークをしていた。

仕事に入るとほとんどひとり作業になる。ビジネスホテルなのでひとり客やふたり客が大半で乱痴気騒ぎをしたような部屋に出くわすことはほとんどない。まずは不在確認をし、ドア周辺の備品整理、換気をする。ペットボトル、缶ビール、缶チューハイは中身が残っていることが多く、コンビニで買った残飯や容器を分別しごみ回収をする。次にベッドメイキング、バスルーム清掃、最後に室内清掃をして完了する。

他の従業員は知らないが佐也子はコーヒークップやガラスコップを洗って拭くための布巾とテーブル周辺を拭く布巾は分けている。なぜそうするかというと、昔、友人からラブホテルの客室清掃のバイトをしていた時の話で、客室に置いてあるコップを雑巾みたいな布で拭いていたと聞いたことがあるからだ。佐也子自身はそれ以来、宿泊したホテルの部屋のコップは洗ってからでないと使えなくなつた。同じ理由から自分が担当した部屋だけはきれいな布巾で拭いておきたいと思うのだった。

仕事をするようになってから分かったのだが、自分に振り当てられた部屋の掃除が終わればその時点で帰れる。日給月給制なので時間は関係ないという訳だ。佐也子はなるべく早く上がれるように昼休憩抜きで働いている。そのことも小嶋は気に食わないのだろう。

私服に着替え、更衣室の入口に置いてあるタブレットで退勤時間を入れる。前職の会社では昔ながらのタイムカードだったが、ここでは勤怠入力すれば給料計算までできるアプリで管理されている。佐也子は前の会社からパソコン教室に通わされていたのでタブレットの操作にも何とかがついていたが、この先新しい電子機器が活用されたらおそらく途方に暮れるだろう。

更衣室を出て廊下を歩いていると同じ制服を着た若い女の子たちが戻ってきた。彼女たちの集団もいつも一塊で動いているが、その理由はみんなベトナム語を喋る外国人留学生たちだからだ。仕事内容は佐也子たちグループと同じだが、給料の制度が違うと聞いたことがある。彼女たちのリーダーも外国人だった。

時間延長された部屋の清掃も彼女たちが担当するのでこの時間に終わるのは珍しいと思つた。職場で声をかけられることもなければ、佐也子が話かけることもなかった。すれ違わざま、佐也子はそつと会釈をし、彼女たちもそうした。

帰りのバスに乗り込む。時間は十五時半でこの時間は朝と違い車内はガラガラだ。今年は九月いっぱい夏の暑さが続き外にいるときは不快でしかなかったが十月に入り一気に気温が下がったので吸い込む空気も心地がいい。遅い午後の斜光が窓を透過して席に座る佐也子の頬を撫でる。前職では十八時、十九時まで働いていたのでこの時間帯に帰宅できる今の仕事はささやかな喜びである。

バスを降り幹線道路から内に三辻入ると自宅のマンションがある。八階建ての四階に部屋があり、すぐ目の前は開門式運河が見える。春には両岸に植わった桜並木が薄ピンク色の帯を造る。住み始めてから三十数年経つ。佐也子にはここで独りで生きてきたという気持ちがあった。四十代で母親が五十代で父親が亡くなったときも離れがたくて、親の残した家に戻ることをせず住み続けてきた。

家のドアを開けると誰もいない家に「ただいま」と言っただけで入る。靴を脱いで部屋にあがるとまず、台所の換気扇を回し、窓を開ける。すると部屋の中に近くの公園で遊ぶ子どもたちの声が一気に入ってくる。

部屋の間取りは玄関がありすぐダイニングになる。カウンターで仕切られたキッチンと風呂・トイレ・洗面所が隣り合わせになっていて、洗面所には洗濯機置き場がある。ダイニングの二辺に接する四畳半と六畳の畳部屋で二DKだ。ダイニングにまつすぐ続く四畳半の部屋は襖を取り除きテレビとソファを置いてリビングに仕立てている。独りで暮らすには十分の広さだ。狭いダイニングの動線を確保するためダイニングテーブルは二人掛の小さいものを買った。

椅子を引き出して座る。五分ほどスマホをいじりながら待ち、空気が入れ替わった頃合いをみて窓を閉め換気扇を止めた。今度は一転して無音状態になった。マンションの上が飛行機の飛ぶ一帯に含まれているため、窓ガラスが分厚く外の音を遮断するようにできているのだ。音のない部屋で黙って過ごす時間が止まってしまっているような気がする。咳払い一つしただけで部屋に微弱な波紋が広がる。それで時間が動いていることを確認するまでに。

次に洗面所に行き、クレンジングで化粧をおとし、上の服を脱いで顔と両腕、首筋とデコルテと呼ばれる鎖骨辺りまで石鹸とお湯でしっかり洗い流す。化粧水と乳液を塗り、ベージュ色のリップクリームを塗れば出来上がりとなる。次の仕事までそんなに時間はないことに急かされて、冷蔵庫から緑茶のペットボトルを出してガラスのコップに注ぐ。それを一気に飲み干すと鍵を握って家を出た。

夜の職場である居酒屋は住んでいるマンションから徒歩圏内にある。住宅街にある個人経営の居酒屋で客も家族連れがほとんどだ。佐也子はずっとこの常連客だった。ここは夫婦で経営していて、佐也子がひとりで行ける数少ない店だった。カウンター席にひとり座ると店の人からよく話しかけられた。

学生やフリーターの子たちをアルバイトで雇っていたが長続きする子がいなくていつも人手不足で困っているのは知っていたが、佐也子が定年退職後も働かなくてはいけないという話をしたら、じゃあここで働いてくれないかと言われたのだ。ふたりとも佐也子より年下で佐也子がギリ「なにもない世代」なのに対して彼らは「新人類」と呼ばれた年代で従来とは異なった感性や価値観を持っていると言われていた。店主である男性は料理学校を出てイタリア料理店に勤め三十代で独立した。女将さんの方はそのときにお客だったそう。

佐也子が通い詰めた理由のひとつに店主の作るチリコンカンやラタトゥイユといった洋風の煮物があったからだ。働き始めてみて、ピザソースやパスタソースのレシピを教わることで出来たのは想定外の得をした気分だった。佐也子の仕事は店主が作った料理の盛りつけや食器洗い、片付けに次の日の仕込みなど厨房内の仕事ばかりであることもありがたかった。ちなみに今日の仕込みは鶏の唐揚げを五キロ分作った。

今日二度目の帰宅。電気を点けると、朝の仕事で着ていった服が椅子に掛けられているのが目に入る。疲れているので「ただいま」は省略した。部屋中にさつきまでいた居酒屋の揚げ油の臭いが充満する。椅子に掛かっていた服を掴んで洗面所に直行し、洗うものと洗わないものに仕分けした。居酒屋で着た服は臭いが付いているので下着も全部脱いで洗濯機に入れた。深夜は洗濯機を回せないの蓋を閉じて、裸になったついでにそのまま風呂に入るのがルーティンである。若い頃と違って風呂に入ることもひと仕事となり、ややもすれば入らずに寝てしまいたくなる。それを防ぐために考えた一連の動作である。結局は風呂に入り、勢いのいいシャワーのお湯が体の汚れと一緒に気分も上げてくれるので入ってよかったとなる。

風呂から上がりドライヤーで髪を乾かしていると、ふと、今日店に来ていた三世代家族の客の事を思い出した。

両親と娘夫婦とその子どもたち六人だった。佐也子が働き始めてからちよくちよく見かける常連さんである。子どもは五歳児くらいの女の子と三歳児くらいの男の子だったが騒ぐことなく行儀のよい子達だった。たいがいの小さな子連れ家族の場合、親たちは騒ぐ子どもに注意もせず自分たちの会話に熱中しており、他の客が不快な顔をするのが常だ。そんなときは、女将が子どもとの相手をしながら騒がしさのボリュームを下げさせるのだ。

今日はいつもと違い静かなテーブルにも拘わらず女将が傍に立っていた。娘さんが暗い顔で俯いているのが厨房の中から見えて気になった。その家族が帰ったあと、家族と話をしていた女将に事情を訊いたところ、娘さんが計算外の妊娠をしたそうで産むことを躊躇しているのだという。夫や両親は彼女に産むことを促したり、墮すことに賛同するのではなく、彼女の意思で決めるべきだと言っているそうだ。これは責任を彼女ひとりに負わせることではないかと思った。そもそもどうして避妊しなかったのか。そんなことを考えているうちに、佐也子の頭は徐々に熱を帯びてきた。

——佐也子の気持ち尊重する。
結婚していた時、夫はそう言った。そして佐也子が選んだのは（もう妊娠はしたくない）だった。

そこでドライヤーのスイッチを切った。部屋はまた無音に戻る。もうこのことを考えるのは止めようという合図であった。

朝、バスに乗ると同時に昨日の忘れ物をした女性のことを思い出した。佐也子は昨日と同じ場所に立ち、そこに座る人を見た。彼女ではなかった。それでもどこか別の場所にいるかもしれないと思い、首だけ左右に動かして探してみた。昨日、彼女が降りたバス停が最後のチャンスだと降りていく人を見ていたが彼女はいなかった。

なぜ彼女のことがこんなに気になるのか自分でも分からなかった。忘れ物をわざわざバスから降りて届けてくれた人に対してちゃんとお礼も言えなかった女性なのに不思議と佐也子は気分を悪くしたりしなかった。それよりもあの重みのあった黒いトートバッグの中には何があったのか、なぜあんな大荷物をバスに忘れていくのか、驚愕といっても過言ではない彼女の放心状態のことの方が気になって仕方がない。

バスが佐也子の降りるバス停に停まった。バスから降りると彼女のこと頭から離れていった。

いつもの時間に更衣室の前まで来ると、ホテルの客室統括マネージャーが声をかけてきた。普段はこの時間ここにいることがない人なので佐也子は何事かと緊張した。マネージャーはまだ三〇代の男性で最近職場結婚したばかりと聞いている。相手はフロント業務をしている女性で何度か事務所で見たとのことのある人だった。結婚の話が回ってきたころ、更衣室の中では小嶋たちがあんな可愛い子をお嫁さんにできるのはおかしいと冗談とも本気ともとれる口調で話していたのを思い出す。それは彼がごく普通の容姿をした男性だったからだ。

佐也子は更衣室のドアの前でマネージャーと向き合うと、知らず知らずのうちに品定めする目で彼を見てしまっていた。

「宮川さんにお願いがあってすけど……」

マネージャーは眉間にわざと深い皺を寄せ、目尻をさげて言った。佐也子は少し後ろにさがりながら、何を言われるのか待った。

「少し前から、グエンさんたちと賃上げ交渉をしまして、こちら側としては、今すぐは無理だっけと回答したら、急に辞めなすって言ってきたよ。それが昨日。それでね、半数くらいの留学生たちがもう辞めてしまったんですよ。欠員はすぐに補充しますから、宮川さんにそっちのチームリーダーをお願いできないかと思ってですね……」

マネージャーは話を続けようとしていたが、佐也子は強引に割り込む格好で、「ちょっと待ってください。わたしはまだ一年しか在籍してないですよ。もっと長い方にリーダーをお願いすべきじゃないですか」

それに対してマネージャーは話を聞いてなかったかのように、

「部屋に置いてあるお客様からのアンケート用紙があるじゃないですか？ 宮川さんが担当している客室のお客様の評価がよくてですね、課長直々に宮川さんを指名してこられたんですよ。お願いしますよ。もちろん、昇給と手当も付けますので悪い話ではないと思いますよ」

客からの評価がよかったという言葉を聞いて佐也子は正直嬉しかった。そんなことを思っているとならマネージャーは「ではそういうことで」と言って事務所に帰って行った。入れ違いに同じチームの従業員たちが出勤してきて、佐也子にマネージャーと何を話していたのかと口々に訊いてきた。まだ引き受けたつもりはなかったので返事に困っていると、彼女たちの後ろから小嶋が顔を突き出した。

「はい、これ」

書類の入ったクリアファイルを佐也子に差し出した。とりあえず受け取ると、

「もうマネージャーから話は聞いたでしょ？ これ、あなたのチームのメンバーのファイルね。来週には補充人員が入るからその人もそっちだから」

小嶋はすでに知っていて佐也子が承諾したものと思っていた。周りがざわついたが彼女はそう言うのと最初に更衣室に入って行った。佐也子が最後に更衣室に入るとみんながちらちら見てくる。作業服に着替えている小嶋の隣のロッカーを開けると、佐也子の肩を二度叩いて更衣室の奥を指さした。「今日から向こうのロッカーを使って」と言い、別のロッカーキーを渡された。「このロッカーキーは差したままでいいから」と言われた。

ひと言も言葉を返せず、ロッカーに入れてあった物を取り出して奥のロッカーまで持ち運んだ。そこにはベトナム留学生の女の子たちが数名着替えていた。

これはもう選択の余地がないのだと思った。彼女たちの間をすり抜けてロッカーに荷物を入れて作業服に着替えてから、改めて彼女たちに声をかけた。

彼女たちの顔に見覚えはあった。小声で何か話していたが佐也子を見ると喋るのを止めた。とりあえず名前確認をしようと、クリアファイルに入った書類を取り出した。そこには佐也子を含む六名の履歴書類と今日佐也子たちが清掃する階と部屋番号が書かれたプリントが入っていた。

「わたしが今日からこのチームのリーダーを務めることになった宮川です。えっと、みなさん日本語は話せますよね」

佐也子は自分でも頓珍漢なことを言っていると思いつつ、彼女たちの返事を待っていた。

「アマリハナセマセンガ、イッテイルコト、ワカリマス」

ひとりの女性が返事をしてくれた。それに安心をして、

「ではお名前とお顔を一致させるため、名前を呼ばれたら返事をしてください」

履歴書類は名前がカタカナで書かれているので一枚ずつ読み上げていった。彼女たちは呼ばれたら手を挙げて返事をした。次に部屋の担当をこの場で割り振ってから更衣室をみんなで出た。

帰りのバスでは、一番後ろの長いシートに座って手足を伸ばした格好で座った。それほど気疲れをしたのだ。今日は佐也子の方から彼女たちに話しかけ、打ち解けるためにと普段取らない昼休憩を取り、彼女たちと一緒にご飯を食べた。みんなちゃんと日本語を聞き取れて、短い会話ならできる子たちばかりだった。日本に来た理由や将来のやりたいことを訊いていると、ちゃんと返事が返ってくる。一番多かった答えは「お金を稼ぐ」ことだと聞いて佐也子は意外に思った。日本は経済的に後退しているのに対してベトナムは年々発展している。それでもまだ日本との経済格差があるということなのだろうか。佐也子の質問に彼女たちは口々に「そうだ」「そうだ」と言った。

ベトナムには日系企業が多いらしく、日本の留学経験を活かしてベトナムに帰って日系企業に就職して高収入の仕事に就きたいという具体的な目標を言ってくれる子もいて感心してしまった。

佐也子は彼女たちの歳の頃にこんなにしつかりした将来の目標を持っていなかったと思っただ。父親が公務員の家庭で育ち、贅沢とは無縁で育ってきたのに、金持ちになるうとか資格を持って安定した仕事に就こうなどという考えは持っていなかった。もっといえば、やりたいことすら見つけられなかったのだと思う。結果安易に手の届く会社を受けて採用され、ただ生活費を稼ぐために働いていた。フリーターという言葉もなかった頃で、学校卒業と同時に誰もが何らかの選択を迫られた。当時の二〇代の男も女も就職と結婚が必須とされていて、やりたい事でもお金にならなければ遊びとみなされた。またそうしている人をモラトリアムと呼び未成熟な人と決めつける時代だった。

就職して二年経ったとき、美術部のOB会で出会った四歳上の先輩と半年の交際で結婚した。そのときは正直言って底辺から浮き上がったという気持ちだった。自分が何者でもない者から抜け出したのだと。

夫は中学校の美術の教師をしていて、お互い若かったので会費制の結婚披露宴を友人たちが企画してくれた。その時の祝いのメッセージの中に夫の同僚で保健室の先生が「もう仕

方がない。諦める」と書いていたのをみつけた。「なにこれ？」訊くと、夫はそれに答えて、「スピード婚は離婚するぞって脅されたんだけど冗談だから気にするな」と笑って言った。そのときは佐也子も笑ったし、保健室の先生とは佐也子も交えてプライベートで何度も食事をした。けれど離婚は現実になってしまった。

そんなことを考えているときに降りるバス停に着いた。いつもなら家まで川べりを眺めつつ歩くのだが足が重く感じられ、河川敷にある公園のベンチに座った。夫のことを思い出すといつもこうなる。離婚の原因は夫にはない。夫は最後まで離婚を考え直すよう佐也子を説得してくれていた。今の佐也子がこういう生き方をしているのはあの時の選択のせいなのだ。

そもそもなぜこんなことを思い出したのか遡ってみた、するとお昼の休憩室のことが浮かんでくる。佐也子たちのベトナムグループとは離れたところに昨日まで佐也子がいたグループが座っていた。そこから途切れ途切れに聞こえてくるのは、自分たちとは一緒に休憩しなかつたくせに……とか、やっぱり嬉しいんじゃないの……という陰口だった。佐也子が視線を向けると小嶋と目があつた。小嶋はふんと言うように顔を上げてから仲間の方を向いて笑った。

佐也子は離婚してからというものの人との関わり合いを極端に避けるようになった。ひとえにあんなにいい夫を捨てた女として、佐也子の友人から批判されたことによるもの大きい。親友に至っては失望したとまで言われた。

仕事以外の接点が増えると、心の扉を開けて中へ招きいれなければならない。だから避けていたのに、避ければ避けたでこうなるのかと思つた。休憩を終えて席を立つた小嶋が佐也子に聞こえよがしに「あの人はわたしたちとは違う人種なのよ」と言つて出ていった。やっぱりこの人は酷いことを言うなど、やはり離れていってよかったと思つた。

夜、居酒屋の仕事に入ると、店主から今日は元気ないねと言われた。

職場の配置転換のことやそのことで前のグループの人から謂われのない非難を受けていることを話した。

「それは料理人も一緒」

と言つた店主は持つている包丁で縦に宙を切つた。

それはつまり、縦社会というジェスチャーだった。料理人の働く厨房という場所には、トップに料理長がいて、次に副料理長、そのあとからは年功かつ実力順になっていて、下っ端はへまをすれば厨房の中で蹴り倒されるのだそうだ。また、雇われている料理長とオーナーで意見がぶつかった場合、料理長が下の者を全部引き連れて店を辞めることもあるらしい。「でもさ、料理人の中にも縦社会に不向きな者もある。そういう人間は早くから独立を目指して仕事してる。俺もそのうち。けど、独立はそんな簡単じゃないし、独立しても店を続けられるかどうかは分からない。それだけ店を継続するのは難しいってこと。じゃあ、はずれた者はどうなるかっていうと飲食店を何十軒も渡り歩くしかない」

そう言う店主は佐也子をじつと見た。だが、どういう意味でこの話をされたのか佐也子には分からなかつた。

「あんた、それアドバイスでも何でもない、自慢してるだけじゃん」
女将さんが割り込んでくれた。

「さつき人と関わるのを避けるって言ってたけど、わたしたちとはまったくそんなことなかったよね。最初はお客さんだったけど関係は変わっても同じだよ。シャイな人だとは思うけど。職場の人ともちよつとしたきっかけで打ち解けられると思うな」

きつと女将は希望的な意見を言ってくれているのだろうけれど、佐也子には寄り添ってくれる女将がありがたかった。

2

朝のバスの中は冬の衣服のせいで隙間がないくらい混んでいる。吊り革を持って立っていると佐也子の顔を覗くように近寄ってくる人がいる。最初は首を反対に反らしていたが、バス停で人が動いたたびに場所を変えては視線を合わそうとするのでさすがに我慢しきれず相手の顔を見た。すると相手は相好を崩して佐也子に抱きつかんばかりに肩を上下させた。

「わあ、ほんとによかった」

相手は第一声でそう言った。それを聞いて、佐也子は（何言ってるの、こいつ）と決して口に出して言わない荒っぽいワードを心の中で言った。

「覚えておられませんか？ 二ヵ月ほどまえにわたしが忘れた黒いトートバッグを渡してくださいましたよね」

黒いトートバッグという言葉で佐也子はあの朝バスに忘れていった女性のことを思い出した。覚えていて、という意味で頷く。

「ずっとお探しました」と彼女は言う。（それほんとかな？）と佐也子は疑った。佐也子のほうでもあの日から数日間バスの中で彼女を探していたが姿をみることもなかったからだ。それに佐也子は週に五日は通勤で同じ時間にこのバスに乗っているのだから、二ヵ月も時間はかからないだろうと。すると、

「お渡ししたい物があります……」

そう言い、彼女は斜めがけにした茶色い革のショルダーバッグから何か取り出そうとしている。混んだ車内でまわりの人にコツコツぶつかり、取り出せないみたいだった。

「あ、先に名刺を……」

女性は一旦鞆から手を抜き出し、サイドポケットに入っている名刺ケースを取り出した。

名刺の肩書きにライターとあり、名前は富永奏と印刷されていた。

「お名前はトミナガソウって読みますか？」と訊いた。

「トミナガカナデです」

混みあったバスのため、お互い声をひそめての会話だった。

バスが停まった。そこは佐也子が降りるバス停だった。佐也子が降りる動きをすると奏もついて降りてきた。

「これをお渡ししたくて」

バスから降りると、すぐさま鞆から本を引き出して、佐也子に向けて見せた。

表紙は山の上に聳える巨石の写真だった。どれほどの巨石かは下方に写っている登山者の小ささで分かった。目を写真の上方に移すと『石を旅する』というタイトルが書かれている。その横に富永奏と著者名があった。

「これ、貴女の本なんです。凄い……。でも何でこれを？」

忘れ物を届けたお礼にしては時間が経ち過ぎているというのが理由だった。

「この本が作れたのは、あるときトートバッグをわざわざバスから降りてきく下さったおかげなんです」

と言ひ、深く頭をさげた。黒いトートバッグに入っていたのは最終校正の終わったゲラ原稿と本に使う写真が入っていたのだそうだ。

「だからあんなに持ち重りがしたんですね」

佐也子の知りたかったことがこれで分かった。

「はい、それで二週間前に本が出来上がったので、お渡ししようと思つたバスの中でお探ししてたんです」

なるほどと思つたが「あれから会うことなかったですね」ともう一つの疑問を訊いてみた。すると、「普段はこのバスに乗ることはないんです」と返ってきた。印刷所に行くために徹夜明けでバスに乗り、肝心のトートバッグを忘れて降りてしまったのだそうだ。

「今朝もあなたを探すために乗ってました」

探すためにバスに乗ったのは四回目だったらしい。

「これからお仕事ですよね。お時間取らせてすみませんでした。改めて、お礼がしたいので連絡先を交換させてもらえないでしょうか？」

佐也子たちの後ろで次に来たバスが停まった。早く職場に行かなければならないと思うがこの場を離れたくない気持ちがあった。

奏はスマホを差し出した。佐也子も鞆からスマホを取り出して、奏の前に差し出した。

「わたしがやってもいいですか？」と奏は佐也子のスマホを軽く人差し指で動かして自分のスマホを上に乗せた。

「できました。ではわたしから連絡しますね。お時間取らせてすみませんでした」と奏は佐也子を見送る体勢になった。

「じゃあ」

体を捻じるようにお辞儀をしてから歩きだした。少し歩いてから振り向くと、奏は同じ姿勢で立って、深く頭を下げた。渡された本は今日の佐也子の鞆には入らないので胸のところを押し当てるように持って歩いている。もう振り向くまいと思つて歩いても、奏がこちらを見ている気配がずっとして、こそばゆい感覚に包まれる。

いつもの佐也子なら知らない相手とは連絡交換はしなかったはずだった。奏には初回から佐也子が作る壁がでなかつた。今も奏とずっといたいと思えることが自分でも不思議でならなかつた。

胸に抱えるように持っていた本を体から離し、歩きながら表紙を見た。今すぐに近くにありベンチに座って中身を観たい衝動にかられたがそんな時間の余裕はなかつた。

仕事でも本を観たくて仕方がなかつた。ベトナムの子たちとのチームに移ったころは一緒に昼休憩を取っていたが、今は元通りになり休憩抜きで仕事をしていた。だが、今日は絶対に休憩を取ろうと決めていて、時間が来るのが待ち遠しかった。佐也子が担当する部屋から廊下に置いてある交換用のバスタオルやパジャマを取り出していると、

「ミヤガワサン、キョウ、タノシソウ」とベトナムの女の子に言われた。佐也子は返事の代わりに彼女に笑った顔を向けた。

休憩室に入ると小嶋のチームが食事をしていた。佐也子に気づくと、みんなの顔が「えっ」

と驚いている表情に見えて可笑しかった。

正直なところ、佐也子にとつて今のチームはとても居心地がいい。ベトナム人の子たちは佐也子個人にまったく興味がなかったため、仕事関連の話しかなくていいからだ。それに同じフロアで仕事をしていても彼女たちは母国語で喋るので何を言われても知りようがない。年齢も子どもどころか孫に当たる若い子なので、これまでになく佐也子のほうが彼女たち世代の流行に興味があつて訊いたりするほどだった。

人のいない窓際に接した長テーブルに席を取った。昼食にはホテルの喫茶室のミックスサンドとホットコーヒーをテイクアウトしてきた。値段は一五〇円と高いのだが、美味しさと聞いていたのでこの機会に食べようと思つて買つてきた。本を横に置いて、先に食事始める。このサンドイッチはトーストされていて、それも佐也子の好みに合っていた。次にコーヒーの蓋を取る。ローストされた豆の香ばしい匂いが鼻先に触れる。サンドイッチを一口食べては熱いコーヒーを飲み込むとそれぞれの香りが鼻孔を通つてでてくる。佐也子は美食家ではないが空腹を満たすのは自分が好きで美味しいと思うものでないと嫌だった。そして今日の選択は間違ひなかったと自分を誉めてやりたい。

食べ終わると容器を袋に戻し、長テーブルの上を何度も入念に拭いて整えた。そこに奏からもらつた本を横から正面に移した。

表紙の巨石をじっくりと観てから、ページを開く。全頁カラー写真で構成されていて撮影者も奏だった。著者の言葉が最初のページに載つていたので、まずそれを読んだ。そこには石との出会いが書かれていた。子どもの頃は誰しも不思議な行動をすることがある。犬と喋つたり、他の人には見えていない（エイマジナリーフレンド）と喋つたりするところを彼女は石と喋つたと書いている。子どもなので他の人も石と喋れるものだと疑問にも思わず小学生になった。石との会話といつても他愛もない内容で、登校するとき毎朝通る立派な家の囲い塀に置かれた大きな石が「おお、今日も元気だね。行つておいで」と言ってくるから「いつてきます」と大きな声で返事をする。やがて登校中の生徒たちの間で奏がいつも同じ場所「いつてきます」と言っている噂になった。そのときからこれは自分にしか聴こえない声なんだなと思つたと書いてあつた。

佐也子はプロローグ的なこの文章に魅せられてしまった。締めくくりに奏は「わたしは石に導かれ日本中、これからは世界中も旅していく。石が人に伝えようとしていることを代わつて伝えることが役目なのだ。この本を通して石の意思がみなさんに伝わりますように」と結ばれていた。

ページを繰るごとにいろんな巨石が現れる。苔を纏つたもの、天から落ちてきたかのような周囲との調和が取れていないもの、巨石の懐に納まる形で建てられた神社らしきもの、草原のなかでサークルを形成しているものなど、それぞれの写真に背景の樹木や空、海が写り込んでいて、佐也子自身が一枚一枚の写真の中に入り込み、次の写真に飛び移つて行くような気持ちにさせられた。

全頁を見終わつたとき、休憩室には佐也子ひとりしかいなかった。休憩室に掛かっている壁時計を見ると休憩時間を三十分も過ぎていた。慌てなくてはいけないのに佐也子の心は本の中の石にがっかりとグリップされている。肉体から精神が離れるというのはこんな感じなのかもしれない。

休憩室を出て、歩いている廊下もぶかぶかしてどこか夢の中のように感じるのだった。

更衣室のロッカーに本を戻し、客室フロアへ仕事に戻ったら、チームの女の子たちが笑って佐也子を見てくる。

「なんで笑ってるの？」と訊くと、それでまたみんなが笑った。

「マジメナリーダー、チコク、オカシイデショ」

と言うのだ。佐也子は遅刻したことがなぜ可笑しいのかさっぱり分からなかった。一番日本語が達者な子が、

「これまで真面目だけが取り柄のような人がこんなことある？　という意味で（ヴァアッアイ、ヴァアッアイ）とみんなで話をしてたら、そこにやってきたので笑ってしまった」と説明してくれた。どうして遅刻したのか説明しようとしたがこれが難しかった。迷ったあげく、ベトナムに巨石はあるのかと訊いてみたら、みんなきよんとした顔をして、また笑った。仕事が終わる更衣室に着替えに行くと、小嶋たちグループも着替えているところだった。「お疲れ様です」と挨拶して自分のロッカーの方に行こうとすると、小嶋が話しかけてきた。

「今日、休憩室でご飯食べてたね。珍しいこともあるもんだね」と言われた。

「はい、そうなんです。観たい本があつて。それで休憩時間オーバーしちゃったんです」と正直に言った。

「そう、それなのよ。あなたリーダーでしょ。そういうことがあつちや駄目だつて思わないの」小嶋はさつきより語気を強めた。

「ほんとに申し訳ありません」

佐也子は小嶋に謝るのも変かと思いつつも妙な顔をしていた。

「だいたいねえ、あなたがリーダーになることもおかしいってマネージャーに進言したのよ。ここにはあなたよりキャリアの長い人がいるってね」

小嶋はこれと言う機会をずっと待っていたんだろうと思った。小嶋が言ったことは佐也子も同意見だ。だが、そうだと肯定したとしても小嶋の文句が終わらないだろうと思った。居酒屋の女将にきっかけがあれば打ち解けられると言ってもらったが、今ではないだろう。ただ、佐也子はこの場において、これまで避け続けてきた人との衝突が今日はそれほど嫌でないことに気づいた。そのことが嬉しくて佐也子は頬を緩めた。それを小嶋に笑ったと思われるように、

「あんた、馬鹿にしているの？」といよいよ怒りだしてしまった。

「違います。すみません」と謝るしかなかった。

さすがに周りにいた人たちも喧嘩になつてはいけなさと小嶋を宥めはじめた。佐也子はいまのうちに立ち去れと手を振ってくれた人にお辞儀をしてその場から離れた。

帰りのバスの中でもずっと本をめくっていた。それは今日あった嫌なことから気を紛らわそうとするのではなく、本を開いた瞬間に再び休憩室のときのように夢想状態になったからだ。今観ている写真は巨石の上にもた巨石が載ったものだった。どのようにして、いつの時代にこれが現れたのだろうか。山腹の林の中に二つの巨石を台座にその三倍ほどの大きさの巨石が横たわるように載っている。表面に幾筋もの裂け目があつて、コックピットと開閉扉のある宇宙船に見えなくもない。周りの木々も相当な年月を経過しているとは思うが、巨石と比べると圧倒的な時間の差を感じてしまう。

もしタイムラプスで現在時から逆再生される映像があったら、辺りの風景は次々に変わっていつてもこの巨石だけは定点観測みたいに同じ場所にあるだろう。奏はこの石からどんな声を聴いたのだろう。この本には具体的に石が発した言葉は書かれていない。石が人に伝えようとしていることがあると奏は書いている。それを佐也子も聴きたいと、この巨石に会って受け取りたいと思った。

3

巨石の本をもらってから、もう二日が経ったというか、まだ二日しか経っていないというか、時間の感覚がおかしい。仕事に出るとき、以前なら小嶋をはじめグループの面々と顔を合わすことが憂鬱だったのが、何も思わなくなった。それだけではなく、仕事をしていても巨石のことばかり考えているのであつという間に退社時間がきている。それは夜の居酒屋の仕事でも同じだった。その場にいるときは女将といつものようにお喋りをしているのに、家に帰ると何の話をしていたのか思い出せない。寝ても覚めても巨石のことが頭からはなれない。夢見心地というのはこういうことなのかと思えた。

今日は待ちに待った休日だ。駅に着くと、佐也子は登山コースを印刷した紙をリュックから出して確認した。奏の本に日帰りでいける巨石があった。朝五時に家を出て、いまは七時半である。平日にも関わらず佐也子と同じ年代くらいの人が大勢いる。ここは耐寒登山で名の知られた山でもあった。

しばらくすると彼らが動き出した。佐也子は最後尾について登山道に入った。徐々に彼らとの間隔がひらいていく。この日のために買った登山靴がすっかり体を支え、勾配のある山道を歩かせてくれている。小石の混ざった土を踏みならす音が山の中に響く。

しばらく、ひとり黙々と歩いていると分岐点にきた。分かれるところに立て札が立っている。片方は耐寒登山の山頂に向かう道でもう一方は佐也子が印刷してきたマップに書かれている自然道だった。マップの示す通りに自然道に入る。十分もしないうちに急に道幅が狭くなり人の歩いた痕跡がない落ち葉で埋まった道になった。片側は渓谷になるのか幾重にも山の斜面が交じり合い緑の色は深みを増していく。後ろから人が来ることもない。本当にこの道であっているのだろうかと不安になりかけたとき、山道を曲がった遙か先に石肌が見えた。樹木に囲まれ全容は見えないが迷いは一瞬にして消えた。九十九折りの登り坂を進むごとに石肌は姿を変える。その繰り返しが数回続いたのちに台座に載った宇宙船然とした巨石の姿態が現れた。見上げたその姿はまさに天から降りてきた船だ。佐也子は知らぬ間にそこにへたり込んでいた。高揚した気持ち収まるまでどれほどその場にいただろう。立ち上がった時にはズボンが土の湿気どころどころ濡れていた。そこからさらに一時間ほどで巨石のある場所に到着した。

巨石は山の中腹にあり、山道は石の壁をすり抜けるほどしか隙間がない。リュックを背中から下ろし壁を通り抜ける。抜け出たところから巨石を観るとその場所が奏の本にあった写真の構図と同じであることが確認できた。

その場所に立つと陽の光が樹木の間から柔らかい光の筋を送り込んできた。ピツピツという高い鳥の鳴き声とグーグーとベースギターのような低音の鳥の鳴き声が交互に聴こえる。風がさわさわと木の葉をすり抜けて佐也子の髪を撫でていく。

巨石に目を向けたまま、すぐ前に座る。目の前には台座にあたる石がふたつ並んでいる。これら三つの巨石がどのようにして、この高い場所に陣取ったのか。人の手が入ったものはあるまいと、見れば見るほど存在の大きさにひれ伏したくなる。また、なだらかな風が佐也子の顔を包みこんだと思ったら、数滴の雨粒が落ちてきた。辺りは陽が射し空は青いままだ。涙が溢れてきた。この気持ちは何なんだろう、自分でも分からなかった。

それからガラスの触れ合うような高い音が耳の中でしだした。気圧のせいかと鼻を摘まんで耳抜きを試みたが、詰まっていたわけではなかった。音は佐也子の鼓動とリズムを合わせるよう軽やかに頭の内側で響いた。

随分長い時間座っていた。声が聴こえることはなかったが、確かに迎えいれてもらったと思う。登山で体を使ったことによる心地よい疲れが瞑想状態に誘ってくれたせいもあるだろう。佐也子は立ち上がり巨石に触れ、お礼の言葉を呟いた。耳の中で流れていたガラスのメロディは知らぬ間に消えていた。

下山して、帰りの電車に乗っていると、リュックの中でスマホがブルッと震えた。取り出して、スマホを開くと画面下にダイレクトメールの通知がきていた。左端のアイコンが石だった。

先日はお時間取らせてすみませんでした。こんなすぐに連絡してって思われると分かっているのですが、お食事でもしながらお話できませんでしょうか？ 佐也子さん（そう呼びしてもいいですか）が巨石の本を覗かれてどう思われたか一日も早くお聞きたくて仕方がないのです。厚かましいお願いで申し訳ありませんが、ご都合のよい日時をご返信くださいませ。

佐也子は読み終わるとすぐに返信を打ち込んだ。

はい、「佐也子」で構いませんよ。それではわたしも「奏さん」と呼ばせてもらいますね。

巨石の本はわたしを変えてくれます。そのことをわたしもお話したい。

今日は仕事が休みだったので、本に載っていた巨石に会いに行ってきました。

帰りの電車の中でこれを書いています。

送信するとすぐに奏から電話がかかってきた。座席を立ち連結部に入って電話を取った。奏は佐也子がどの巨石に会いに行っていたのか言い当てた。電車はいまどこを走っているのかと訊いてきたので、次に停まる駅名を言うと、このあと予定がなければ、会いませんかと言った。聞けば、この電車の通る沿線に自宅があるので駅に近い店で食事をしよう。

送られてきた店情報のURLを開くと駅はこの電車が三つ先で停車する駅だった。

降りたのは踏切のある小さな駅だった。改札を出ると地図を見てもなく駅前にその店があった。屋号が『あさひ食堂』という名前だったので下町の大衆食堂を想像していたが、表には『あさひ書店』と書かれた看板が掛かったままでその下の暖簾に『あさひ食堂』と書

いてある。それだけでここが元本屋だったことは容易に察することができたが、戸を開けて、中に入るとまるで図書館のように本がぎっしりと並び、客は食事をしながら本やノートを開いていた。

黒いサロンをつけた女性が佐也子のそばにやってきた。

奏だった。あまりに馴染んでいるので最初は全然気が付かなかった。

「えっ、ここで働いているの？」

「いえ働いてません。週三で食べに来てますけど」

奏は女店主の方を見て、目が合うと手を振った。

「じゃあ、ここに座りましょうか？」

そう言う佐也子を先に座らせた。それからカウンターキッチンに行き、取り皿、おしぼり、箸をテーブルに置く。カウンターの前に並んでいるおばんさいを小鉢に入れてこれもテーブルに置いていった。

「お酒、飲まれますよね？」

奏は白ワインのボトルとワイングラスを置くと、サロンを外して向かいに座った。

「まずは乾杯しましょう」

奏はワインの蓋を捻って開け、佐也子のグラスに半分ほど注ぎ、次に自分のグラスにも同じ量を注いだ。

乾杯とグラスを軽く合わせると、ふふっとお互いに笑いがでた。

「このまえは本当にありがとうございます。あのトートバッグがなかったらこの本はできてなかったです」

テーブルに額が付くくらい頭を下げてきた。

「もう謝らなくていいですって。わたしこそあの巨石の写真を観ていると日常の悩みがどこかにいってしまうの。職場の人間関係とか苦手で毎日が憂鬱だったのに何も感じないし、巨石のこと以外あまり記憶もないの」

奏からその理由はと、訊かれて、佐也子は理由を考えたこともないし、考える必要があるのかと思った。

「理由はわからないわ」

佐也子はそう言いながら、店の中をゆっくり見回した。

「ここって本屋さんだったんだよね？」

佐也子は行き詰まった会話を避けるため話題を変えた。

「佐也子さん、理由は必ずあります」

奏はなお追求してきたので、責められているようだった。

だが、佐也子の顔が強張ったのをみて、

「やっぱり分かりますよね。『あさひ書店』の看板が付いたまんまですもんね」

互いにぎくしゃくしていて、また会話が止まった。

「お料理美味しいね」

佐也子は会話を繋げようと小鉢に箸をつけて言ったが、心中はいつものようにこの場から帰りたくなっていた。

「気分を害させてしまったでしょうか？ 『石を旅する』というタイトルにしたのは石が伝えようとしていることを多くの人に分かってもらうには、石に会ってもらうことが大事だ

と思ったからです。佐也子さんがすぐに会いに行ってくださいだったので嬉しくて……。でも、急ぎ過ぎました。これからも『気づき』はあるはずなので、どうか気持ちを閉じることをせず受け入れてくれませんか。心からのお願いです」

奏はまたテーブルに付くほど頭を下げた。
キッチンの方で佐也子たちの様子を見ていたオーナーが何かを察したのかテーブルにやってきた。

「いらっしやいませ。変なこと言いませんでしたか？ この子ったら石に取り憑かれてますでしょう」

奏の頭をぼんぼんと軽く叩きながら言った。

「さっきお話の声が聞こえてきたんですが、この店のことで。わたし生まれたときからここに住んでるんですが、そのときから本屋はあつたんです。幼稚園くらいまでは親が絵本を買ってくれ、小学生になると学習雑誌やコミック本、中学生になると小説や参考書を買うなど自分の成長を見届けてくれた場所だったんですよ。それが十五年前かな、本屋のご主人が亡くなって店を閉じるって聞いたとき、わたし、会社を辞めてこの店を買ったんです。他の人に買われたらこの建物を潰されてしまうって思ったから」

佐也子は信じられないというジェスチャーで口に手を当てて目を見開いた。

「わたしの背中を押してくれたのが奏なんです」

奏は大学進学を機に実家を出てここに越してきた。ふたりとも（Amazon）で本は買わない主義でよく本屋で顔を合わせるようになったのだそうだ。

「わたしは五〇歳で一度も結婚したことがなく、老後のためにお金は貯め込んでたんですね。やりたいことがある訳でもなく。ただ働くことは苦にならず、どちらかといえば好きでした。定年で働くところがなくなったらどうなるのかと漠然とですけど心配でした」

本屋のご主人が亡くなり、常連だったふたりは葬儀にでた。そこで親族から店を売ると聞いたそう。彼女は本屋が無くなることを悲しく思うだけだったのが、奏が本屋を買ってずっと仕事ができる場所を持つべきだと言ったのだと。

「わたしは奏に人生を変えてもらったと思っています。貯金は無くなり借金はできましたが、十五年続けて来られています」

そう言ってオーナーはキッチンに帰って行った。

「康子さん、ああ言っていましたけど、子どもの時の思い出を消さないために本屋を買う決断をしたのは彼女ですから」

佐也子はふたりの話を聞いて、自分とは別世界の人間だと感じたがきつと素敵な世界に違いないと思った。

「わたしが巨石に会いに行ったのは、石の音が聴きたかったからよ」

本に書いてある通り、何者かに導いて欲しいのだ。巨石を覗いていると日常の悩みが消えていくのは揺るぎないものに対する畏敬の念だというのは分かる。

「佐也さんは聴こえます」

きっぱりと言った。

「どうして？」

佐也子は胸が熱くなった。

「トートバッグを届けてくださったとき、わたしちゃんとお礼も言えなかったこと覚えて

おられますか？ この本を作るとき、石から必ず同じように『石の声』が聴こえる人が助け
てくれるって言われてたんです。佐也子さんを見た瞬間、この人だって思って。体が痺れて
しまつて言葉がでなかった」

奏は我々がいまこうしていることは必然なのだと云った。

「さっきのお話で現実の記憶が薄らいでいるって言われたでしょ、それなんです。石の時間
に誘われる人は現実の出来事が軽くなる。『石を旅する』とそうなつてしまふんです」

4

奏から渡された宿題と「気づき」があるという予告が佐也子を奮い立たせるのか、朝の出
勤の支度を終え、玄関で靴の紐を結んで立ち上がるまでこれまでになく気合いがはいるのだ
つた。バス停に向かう公園沿いの道を歩きながら、目は石を探していた。とはいえ、道路は
アスファルトだし、家の囲いもブロックかコンクリートばかりで石はないと諦めかけてい
たら、道の角や民家の脇に結構な大きさの石が次々に目に飛び込み始めた。それらの石たち
は何かの役割を果たしているでもなく、風来坊の様相で姿を晒しているのだった。

更衣室に入ると小嶋たちの視線が刺さった。この前のやり取りからこうして意識して向
き合うのは初めてだった。突然、バス停に行くまでに見た石が脳裏に浮かんだと思つたら、
「存在」に良いも悪いもない。そこにあるからあるのだと、石がそこにある答えが出てきた。

小嶋たちの横を通るとき、

「おはようございます。この前はすみませんでした」

とするすると言葉がでた。まさか詫びられると思っていなかったのかみんなが虚をつか
れたような顔をする。

「おはよう。謝るってことは悪いと思つたわけ？」

小嶋が言つた。

「マネージャーから言われたときは自分より長く勤めている人がいますと言つて断りまし
たが課長からの任命だと言われ、それに対して何も言わないまま承諾した形になりました。
小嶋さんにもわたしの意思を伝えませんでした。それをお詫びします。でも仕事を評価され
たこと自体は嬉しかったです。いずれにしろ、なぜあのような立ち話で言われたのが分か
らないです」

小嶋がまだ何か言おうとすると、グループのひとりが、

「小嶋さんもういいって。わたしたちの誰かがベトナムの子たちと仕事するより宮川さん
の方がやりやすかつたと思うよ」

他の人たちも頷いた。

「宮川さんにはわたしたちの苦労は分からないか」

小嶋がそう言うと、そのまえに言った人が違うという意味で首を振っていた。

「そうですね」

佐也子は笑つて済ませた。いままで小嶋のグループは全員が佐也子を嫌っているものだ
と思つていたが、小嶋以外の人は佐也子に別段何も思っていないのだと分かつた。ただ小嶋
に意見しても彼女は引かないと分かっているので帳尻を合わせていただけなのだ。

居酒屋で開店前の仕込みをしていると、この前の三世代家族で食事に来ていた妊娠している娘さんがひとりで店に入ってきた。

「ちいちゃん、どうした？」

店主が厨房から出て、娘さんのところに行った。

「女将さんは？」

不安げで声も少し震えているみたいだ。

「買い物に出て行ってるけど、すぐ戻るから待ってたらいいよ」

店主はテーブル席に温かいお茶を置いて娘さんを座らせた。

佐也子は付け合わせの野菜サラダを仕込んでいるところだった。大型のピーラーで半分に切ったキャベツを削っていく。包丁とは比べものにならないくらい、細く薄い千切りが高速でボールの中に落ちていく。そんな作業をしつつ、娘さんに注意を払っていた。

入り口の戸が開いた。

女将さんは大きなカボチャを抱えて戻ってきた。

「ちいちゃんが来てるよ。なにそれ？」

店主はカボチャを見て言った。

「来週は冬至でしょ。今買っておいたら安いから買っといたのよ」

女将さんが荷物をカウンターに置くと娘さんの前に座った。ふたりは佐也子に聞かれてもいいと思ったのか厨房の中にも聞こえる声で話している。

ボールのキャベツが満杯になってきたので削るのを終了し、次に水菜を洗って根っこを切り落とした。三センチ幅でカットしたものをキャベツの入ったボールに入れて混ぜ合わせる。とんかつやハムカツ・エビフライの添え物として大量に盛りつけ、そこに自家製の人参ドレッシングをかける。この野菜だけお代わりを頼む客もいるほどだ。

ボールからタッパに移しているとき、娘さんが、

「嫌なんです」

とひととき大きな声をあげた。

そこまではこの前に女将さんから聞いていた話をなぞるものだった。産むのも墮すのも娘さんの意向に添うとみんなが言っている。娘さんは自分に決めさせる夫や両親の態度は、さも思いやっている感じだろうが、実は自分たちの気持ちを出したくないのだ。責任を押し付けるのはずるいと言っている。

佐也子は自分の結婚のとき妊娠九カ月で出産し二時間で子どもを亡くした。この歳になるまで引きずっているかといえれば違うだろう。けれど、身近なところでこのような話を聞くと否が応でも思い出してしまう。

家から歩いて行ける市立病院で妊娠中の定期健診をしていた。佐也子の妊娠をみんなが喜んだ。ただ、妊娠が分かってから出産するその日まで悪阻が収まらなかった。安定期に入って誰もが悪阻から解放される時期になっても続いたので、検診のときに申告すると血液検査をされた。肝臓疾患があるかを確かめるためだった。検査結果は問題なしだった。子どもが亡くなったあとになって、あの悪阻は拒絶反応だったのだろうと言われた。次の妊娠でも同じことが起こる可能性があるため、羊水を取って胎児に染色体異常があるかどうかを調べる必要があると言われた。

子どもを産むか産まないかを決める権利は母親にあるという風潮が出てきたのは昭和の終わりころだろうか。家父長制度のころは三年子どもが授からなければ嫁失格とされ家を追い出されたという話も嘘ではないと聞いていたが「家を守る」「跡継ぎ」という制度が薄れ、男の子を絶対にといいこともなくなっている。それ自体は悪いことではないと思う。

娘さんの嘆きは当時の佐也子なのだと思う。産んだあとに待ち構える育児や生活のこと、随したあとにつきまとう罪悪感をどちらも背負いきれないと思っっているのだろう。

佐也子は予約席の準備のため厨房から客席に出た。

「宮川さんはどう思う？」

女将さんがいきなり訊ねてきた。娘さんも佐也子の発言を待つ姿勢でいる。

「産んで欲しいと言われたら産みますか？ 産みたいのかと訊かれたらどう答えますか？ いずれも人のせいにしちや駄目だと思います」

放った言葉は佐也子に戻ってきた。なぜ、あのとき夫の気持ちを聞かなかったのだ。いや、もう二度と子どもを亡くしたくない気持ちで新しい命を授かることなど論外だったではないか。夫とふたりで子どものことを考えることから逃げ出したのは佐也子自身なのだ。

「まずあなたがどうしたいか考えて答えを出してください。それを旦那さんやご両親に話して、次に旦那さんとご両親がどうしたいか訊く。絶対にです。そうすれば後になってお互いに責任を持つことができる」

居酒屋からの帰り、いつもはまっすぐ家に帰るのだが、今夜は風が吹いていない分寒さが和らいで感じる。そのせいもあって川沿いの公園に寄りたくなったので道を曲がった。日付が変わる時間なので公園に人はいないが、向こう岸には高層マンションが立ち並んでいて、いくつかの部屋はまだ照明が点っていた。

鉄柵の前にある石のベンチに座る。しばらくすると目が暗闇に慣れてきて周りがよく見えるようになった。川面から突然魚か何かが跳びだし波紋ができる。目の端に何かがあることに気づき改めて見てみると、欄干に大きな鳥が留まっているではないか。「わあ」と声をあげそうになった。辺りが暗いので黒い鳥なのか、ただ黒く見えているだけなのか分からないうがシルエットを見る限り鷺の一種だと思われた。鳥目といって鳥は夜には目が見えないものだと思っていたが、電飾や部屋から放たれる照明の光が深夜でも鳥に視力を与えているのだろうか。ひとたび驚くことは忘れようと、石のベンチに載せた腰を二度、三度左右に動かして、心地よいポジションを探す。

落ち着いたところで、さつき店に来た娘さんのことを考え始めた。結局、今夜はお客さんが少なく、閉店まで彼女は店にいた。誰か迎えにくるのかと思っていたが来なかった。ひよっとしたら、家族もどう対処したものか見当もつかなくて彼女をここに来させたのかも知れないと思った。その状況は、佐也子が子どもを亡くしてどうしようもないくらい落ち込んでいたときと似ていた。

子どもの死を夫は悲しんでいない、どちらの親たちも悲しんでいないと思った。佐也子以外は亡くなった娘は生を受けてこの世にでてきたとは思っておらず、流産や死産と同じ扱いをしているのだと。もしくははこの世に縁がなかった子として排除してしまっているのだと思い込んでいた。あれから四十年以上経ったいまだったら、あの興奮状態の佐也子に家族がどう対応していいか分からなかったのだと思える。自分のキャパシティーを越えた問題

に何が正しいかという判断はできなかった。だから誰かに責任を転嫁することでしか自分を守れないのだ。それでは何も解決しなかった。佐也子には経験があるから、今日訊かれたときにお互いの気持ちを言葉にして出さなければ駄目だと言った。

川面からまた何かが跳ねた。

そろそろ家に帰ろうかと冷えた太腿をさすっていると、目の前の石が動きだした。石が動くはずがない。そう思っただけと見ていると石は四本の足と頭としっぽを張り出した亀に変わった。ひとりきりの空間だったはずが、魚に驚に亀が寄り添っていてくれたのだった。

5

石は時間

だから人は石を旅する

石は言う

失うものはないと

持っていないのだ

石はそのことを知っている

この文章は奏の本の巻末に書かれたもので、佐也子はこれを便箋に書き写して部屋の壁に貼っている。仕事に出るときにさっと目を通すことが日課といってもいい。巨石に会いに行くことも継続的に続けているが、遠方にある巨石が多くて、まだ三カ所しか行っていないのだが。訪れたことのない県へ飛行機や新幹線で移動し宿に泊まる。これまで旅行といったら会社の慰安旅行くらいでひとり旅などしたことなかったのに巨石に会いに行くという目的があればひとりでもどこにでも行けるのだった。

奏に出された宿題である「理由」を考え続けている。あれほど人を避けていたのに、最近では人に興味を持つようになった。もしかすると、それは自分だけ少し先の時間を生きているからではないか。先の予定として巨石に会いに行く日が決まるとする。すると佐也子ももうその時間に到達している気持ちになり、今が過去となる現象とでもいおうか。

巨石に会いに行けないときは石を探して歩くことにしている。特に遠出をするわけではなかった。家の前の河川敷をただ歩いているだけだ。支流である川から閘門を境に本流に繋がる。ある時は河口に向かって歩き、ある時は上流に向かって歩く。護岸工事がなされているので水際に行ける場所は限られているが川の上は空が広がり天気の良い日は何時間でも空を見上げながら歩いていける。とにかく石に触れていると落ち着くのだ。

奏から家に来ませんかと誘いのメールが届いた。「あさひ食堂」で会ってから半年以上が過ぎていたがまた会う日がくると確信していたので驚きはない。

再び「あさひ食堂」のある駅に降りた。改札のところまで奏が待っていてくれた。今回で会うのが二回目だとは思えないくらい古い友だちだったような感覚がする。今日の奏は仕事のとくと違ってラフな格好だ。髪の毛も結わずにおろしている。奏の顔やスタイルをひとことというとなげかかっていると思う。さりげない服装や化粧と髪型なのだが、人の中にも目立ってしまう。

佐也子が中学生のときに学年一人気のあった女の子がそういうタイプだった。何もかも揃っているうえに、性格も穏やかでおまけに成績もよかった。女子たちは自分とあまりにかけ離れていると羨望ではなく憧憬の対象になるのだとその同級生から学んだ。奏の今日の服装も白無地のTシャツに黒のジーンズに茶色のコンバースのハイカットというシンプルさだが、改札を通る人たちがちらちらと奏を見ていく。

冷夏だといわれていたが、七月も終わりになると、例年並みに蒸し暑く大気にあたると汗が噴き出してくる。

「佐也子さん、お久しぶりです。今日のお洋服もヘアスタイルも素敵です」

奏が誉めてくれた。佐也子は声には出さなかったが弾む思いが顔に出てしまう。いつも奏のセンスに感心しているので自分も倣ってみようと髪は何日か前に美容院で白髪染めにピンクブラウンの色にし、服も佐也子がいつも着る服とは違うブランドのものを買ってみた。並んで奏の家まで歩くあいだ、佐也子は異様に照れくさかった。大昔に好きな男とデートしたときのようなだと思った。

駅から十分ちよつとで昭和に建てられたと思しき一軒家が立ち並ぶ町内にやってきた。奏の家を勝手にマンションだと思っていたのでその中のひとつに奏の家があったときは驚いた。

「ここは借家？」

実家は他県だと前に聞いていたので訊ねた。

「持ち家です。どうしても庭付きの家に住みたくて三十歳になったときに買いました。中古物件なのでマンションを買うよりか安かったです」

門扉をあけて玄関までのあいだに前庭がある。椿か山茶花の木が植わっていて、すっかり土地に馴染んだ石が十個ほどランダムに置かれてある。建ったときから嵌まっていたと思われる木製のガラス引き戸を開けると、広い三和土が現れた。そこにも沓脱の大きな石がある。広い板場があってもう一段上がったところにも木製のガラス戸がある。

佐也子の育った家もこんな家だったと懐かしく思った。黒く艶のある柱が白い壁を仕切っている。天井はリノベーションで取り払ったのか梁が見える構造になって上に貼られた白いボードに照明が下がっている。最初の部屋は壁一面に本棚が据え付けられており、どの棚も本で埋まっていた。美術館の展示室のように畳の上に木の台座が置かれ、その上にいろんな色・形の石が飾られている。ここに留まって本や石を見ていたかったが、奏は奥のリビングから手招きしている。

「素敵なお家ね」

お世辞ではなくそう言った。

「ありがとうございます。嬉しいです。ここにある家具や置物は祖母の家にあったものがほとんどなんです」

確かにリビングにある食器棚はこの家に相応しい水屋箆筥といわれるものだし、壁や棚に飾られている置物は土人形や紙細工、茶箆筥の上には何十体もの〈こけし〉が並んでいた。

「こっちに来てください」

奏はリビングのソファ越しにまた手招きをした。今度は障子を開けて待っている。

ソファの横を通るときにもすっかりソファを確認した。モスグリーンのベルベット調の背凭れの付いた三人掛けでアームのデザインが特徴的だった。

障子の前にくると縁側廊下があり、ここにも庭があった。

「すごい」

ここには奏の本の中にあつた石を再現したような大きな石が積まれていた。

「これをお見せしたかったんです。これ自分で運んで積み上げたんですよ。家の近所にあつたものばかりですけど」

「あれ？」

石の傍に小さな石……と思っていたものが動いた。まさか……と思っていると、

「あれは亀です。かめ吉つていいいます。飼つてるわけじゃないんですけど、ずっとあそこに住み着いていて」

佐也子は石と亀には何か関係深いものがあるのかもと思った。

「こちらにどうぞ」

奏はいつの間にかソファのところに戻っていた。佐也子を三人掛のソファに座らせると、台所からお盆に載せた急須と湯呑みを運んできた。やけに小さいし持ち手がないなと思つてみるとアラジンのポットから急須にお湯を注ぎ、それを抹茶茶碗に流し出した。それからまたお湯を注ぎ、こんどは湯呑みに注ぐ。

日本茶とは違う香りが漂つてきた。

「台湾で買つてきたんです。入れ方も台湾式」

日本でいう一番茶を台湾では捨てるんだと思ひながら、涼やかな香りのするお茶を口にした。

それから奏は台所に立ち何かを作り始めた。ある程度準備をしていたのか十分ほどで今度は井鉢をお盆に載せてやつてきた。

「稲庭うどんの温かいのです。天ぷらも揚げました」

白い大きな丼の程まで黄金色のお出汁が入っていて、細いうどんが浸かっている。うどんの上には刻んだネギが載せられているだけのシンプルなものだが、出汁の香りが食欲をそそった。別皿に玉子とちくわとごぼうのササガキの天ぷらが載っていた。

「これって、このまえのあさひ食堂さんで習つたの？」

ごぼうのササガキをうどんの上に載せながら訊いた。

「違います。料理はおばあちゃん……、この家具や置物を持つてた祖母から教わりました。わたし、結構長いことおばあちゃんの家に預けられてたんで」

なんでも奏は難産だったそうで母親が産後の肥立ちが悪くて0歳から二歳くらいまで祖母が育ててくれたのだそうだ。やつと母親の体調が戻るとすぐに妊娠して、また預けられるという感じで。祖母は奏が産まれたときは四〇代だったし、文句も言わず育ててくれたのだと言う。

「おばあちゃんは亡くなる一年くらいまえから寝たきりになったんです。両親は施設にいられようとしたんですけど、わたしが大反対して、おばあちゃんの介護はわたしが全部するからつて言つて。だって、赤の他人におばあちゃんのオムツを替えてほしくないから」

奏はフリーランスになった理由が実はこれだったのだと告白した。

「結局は家族も同意してくれて、介護は一緒にしました。叔父や叔母、いとこも加わつて、当番でおばあちゃんの家に泊まつて。いとこ同士で泊まるときもあつて、それつて子ども時代の夏休みを思い出しました」

話を聞いていて、こういうところも奏の魅力なのだと感じた。

「台湾の話、しましょうか？」

奏から石の話が聞けると心が弾んだ。

食べ終わった食器を片付け、新しくお茶を入れ直し、ナッツが練り込まれたソフトキャンディーを出すと、台湾の巨石を取材に行ったことを話し始めた。出版した本のおかげで石にまつわる仕事ができるようになり、今回もそうだったのだそうだ。

「象山公園って台北市にあって、そこから小高い山に登っていくと台北101っていうランドマークタワーが建つ辺りの景色が眺望できる場所があるんです。そこに巨石がごろごろとあって最高でした。台湾の先史時代には、南米と共通する巨石文化が栄えていたらしいです。もっともっと調べないとい記事になりませんけど」

奏がスマホの画面に写真を出して見せてくれた。夜の写真では日本のお祭りの時の屋台がずらりと並び、人混みを写した写真が何枚もあった。

「これは夜市って言って、夕方から深夜二十四時過ぎまで毎日営業しているんです。台北にいる間ずっと食べに行っていました」

使い捨て容器に白米が盛ってあり、そのうえに豚の角煮を潰したような肉が載っている写真があった。

「これはルーローハンって言って、どの料理にもセットとしてついてくるんです。さすがに毎日毎日、台湾料理ばかり食べていると食傷気味になってしまいました」

奏は台湾から戻ってすぐにスーパーでにぎり寿司を買って食べたと言って笑った。

佐也子には写真の料理がどれも美味しそうに見えていたが、確かに自分たちが毎日食べている食事はすべてが日本料理ではなく、カレーもあれば、チャーハンもあるし、パスタもある。そういう意味で日本は食に恵まれていると思った。

奏の近況報告に区切りがあったとき、佐也子は部屋に書き写して毎日読んでいるポエムのことを尋ねようと思った。その前になぜあの文章を日々の教訓のように受け取ったかを言わなくてはならないと思った。

「ちょっと、わたしのことを話してもいいかな。わたしはね、奏さんの本の、巨石のおかげで、長い間、自分が殻に閉じこもったことに気づかされたの。若い時に結婚と離婚を経験して、それからずっとひとりで生きてきた……、生きてきたと思ってたの。」

けどね、ひとりで生きてきたっていうのは無人島で自給自足をしてる人のことで、わたしは社会の中に混ざって仕事してスーパーで食べ物を買ってる。人にだって世話になっていくはず。ひとりで生きてきたっていうのは、結局人を遠ざけ、関わらず生きてきただけのことなんだと。わたしはただの臆病者なだけだって分かった。そう思えるようになったのは石を旅したおかげだと思う。過去のわたしをもうひとりのわたしが客観視できた。これが奏さんに出された『宿題』の答えを必死で考えた結果です」

奏が何か言おうとしたので、それより先に、

「けど、分らないことがあるんです。あの本の巻末に書かれているポエムのような文章で『石は言う 失うものはない 持っていないのだ』って。」

さつき奏さんはお祖母さんの最後の介護の話をされたでしょ。お祖母さんは孫である奏さんや子どもたちに世話をされながら亡くなった。残された人はお祖母さんを『失う』のではないのですか？ わたしは結婚中に我が子を亡くしました。抱くことも顔を見ることも

許されず茶毘に付された。

わたしは今も子どもを亡くしたと思っただけですが、石が伝えようとしている意味が分からない。分からないのだけれど、理解できれば救われる気がして毎日目につくところに貼ってあって読んでいます」

佐也子が話し終わると、奏は長考に沈んだ。子どもの死というセンシティブな内容なので気を使わせているのだと思った。

「わたしたちは自分たちの人生が全体時間だと考えますよね。けれど、石の時間から見ると人の人生時間は一瞬のもの。人は生まれると、この世界からいろいろな物を借り受けて、生きています。そして死ぬときは何も持たずにこの世界からいなくなる。つまり借りた物を返して去るじゃないですか。人はこの世界で所有することはないので、失うものがない。その理解がないと、人は奪い合ったり、持っているもの失ったと思うから苦しむのだと石は伝えているのです」

預言者の厳かさで答えてくれた。

「では、死んだ我が子はどこに行ったのですか？」

佐也子はまだ納得がいかなかった。

「どこにも。わたしたちと同じで、生まれてこの世界にいて何も持たずにこの世界を去っただけです」

『わたしたちと同じ』という言葉が胸の内で繰り返される。

自分が産んだ子どもを所有物だとは思ったことはなかったが、失ったと思いつつ続けてきたのも事実だ。我が子はこの世界にいた。佐也子と同じように、ほんとにそうだ。人は何も所望しない。だから何も失わないという「石の声」の意味がやっと理解できた。

午後七時近くになってもまだ明るさが残っていた。あつという間に数時間が過ぎた。あの後、奏は佐也子をひとりにしてくれた。我が子を亡くしたことは一生癒やされることのない苦難として封印していた。それがこんな形で開かれるとは。おかげで佐也子は自分の子どもを新しい場所へ、哀しみのない場所へ移すことができた。確かにあの子はこの世界にいたのだと。

駅まで送るといふ奏の申し出を丁寧で断った。今日のことをじっくりと考えながら帰りたいからだ。帰り際に中庭と前庭の石をもう一度じっくり目に焼き付けて家を後にした。駅前まで来ると『あさひ食堂』に暖簾がでていた。この前、このオーナーは本屋を買うという、人生を大転換させる決断をいとも簡単にやっつてのけた人だとして驚愕したことを覚えている。佐也子には絶対できないと思っていた。今日の佐也子には、自分にもできると思えた。そしてその変化に佐也子自身が驚いた。

6

職場の更衣室で着替えをしていると、前のチームのみんながこちらを見ているのに気づいた。もじもじしているというか、こちらに話があるみたいだった。ふと、そこにリーダーがいないことに気が付いた。何かあったに違いないと思い、着替えを済ますと彼女たちのところに行った。

「おはようございます。今日、小嶋さんは？」

と訊いてあげた。それに反応してか、みんなの顔がほっとした表情に変わった。

「小嶋さんのお孫さんが昨日亡くなったのよ」

この前、仲裁に入ってくれたメンバーが言った。小嶋の孫といえば、ひとり娘が妊娠してやっと授かった子だと聞いたことがあった。佐也子は彼女の哀しみがいかばかりかと思っただ。通夜も葬儀も家族葬らしく、みんなで供花をしようと話しているのだそうだ。

「わたしも加えてください」

佐也子は聞くなりそう言った。昼休憩のときに詳しい話をしようということ客室清掃に向かった。

空室になった部屋に入ると残り香や洗面所に捨てられたアミニティで男女どちらが泊まったのが分かる。今日の担当の部屋は髭剃りと便座が上がった状態だったので男だと思っただ。室内は散らかっておらず、ゴミもほとんどなかった。こういうタイプの男性は営業職ではない。技術職か事務職の、成果をあげることより几帳面な仕事を求められる人に多い。佐也子はそういうことを考えながらも掃除をしている。デスクの上にはレシートやパンフレット類を置いていくので前日どんなところに居たのかも見当がつく。今日はデスクに雑誌が残っていた。雑誌を取り上げて表紙をみると科学雑誌だった。珍しい本だなと思ひ、汚れもないので持って帰って読もうと私物を入れるナイロン袋にしまった。

昼休憩になり、休憩室に行ってみた。みんなはずでに集まっていて食事をしていた。佐也子も同じテーブルに座り、買ってきた菓子パンと缶コーヒーを出して食べ始めた。先に食べ終わったひとりが小嶋の孫がどういう状況で亡くなったのか話し始めた。この人は小嶋と一番仲がいいメンバーだった。

孫は幼稚園で数日前に腹痛で病院に行き、急性胃腸炎と診断された。治るどころか、日を追うごとに重篤化し痙攣と意識障害を起こしたのだそうだ。胃腸炎と痙攣の関係性もわかっておらず、小嶋は医者を医療ミスで訴えると言っているそうだ。普段の感情的な小嶋ならそうなるだろうと思った。

続けて、話をしていた彼女が当分の間、自分がリーダー代行を務めることになったと言っただ。それはマネージャーの意向だそうで、それでいいかとメンバーたちに訊いていた。小嶋がいつ仕事復帰するか分からないし、それで構わないとみなが賛成していた。佐也子もそれがいいだろうと思った。相談のうえで供花につける名称は『TNホテル 友人一同』とすることになり、葬儀場に供花の依頼をした。請求額を人数で割るとひとり四千円になった。

夜の居酒屋でも小嶋のことが気になって仕方なかった。佐也子には昔から不思議な体験があつて、何の関連性もないのに(ある人)のことを思い出したりすると、その直後にぼったり見かけたりするのだ。そういう偶然があつても損にも得にもならないのだが。

今日のように何度も思い浮かべるときは、相手も佐也子のことを考えているのだろうかと思像する。小嶋に連絡してあげたいが、SNSに繋がっていないしメールアドレスも知らなかった。もしかして名前で検索して友だち申請をすれば繋がるかもしれないと、エプロンのポケットに入れていたスマホを取り出した。

スマホを開ける前に店主の方を見た。今日の来客のピークが過ぎオーダーも入っていない

い。客席にあるテレビの前に立ち野球中継を観ていた。これなら安心して開けられると、スマホの画面をなぞった。予感は大当たりで、小嶋からメールが来ていた。いつ教えたのか記憶になかったが探す手間が省けたと思った。

メールの内容は、今の自分の苦しみを分かってもらえるのは子どもを亡くした佐也子をおいて他にいないからと書いていた。入社してで一緒に昼休憩をしていたころ、小嶋は佐也子に質問攻めで何もかも聞き出した。離婚したことも子どもを亡くしたことも。なんで自分だけプライベートなことを晒さなければならぬのかと思つて、それ以来距離を置いていった。

小嶋なりの佐也子を仲間に入れる手段だったのか、親分気質なのかは今でも判断はつかないが、逃げずに言いたくないという気持ちを伝えれば済んだことだと、いまなら思える。このように過去の自分を修正しやり直そうと思えるのも奏の本、「石の声」を聴きたいと思つているからに他ならない。

返信には〈哀しみを抑え込まず、哀しみ抜いてください。いまはそれしか言えません。わたしでよければ、いつでもメールください〉と送った。

スマホをポケットにしまおうとしているとき、女将から呼ばれた。

客席に出て行くと、娘さんがひとり来ていた。スマホを見ているときに来たみたいで気づいていなかった。

「ちいちゃん宮川さんにお礼が言いたいわ」

女将が娘さんに話をするよう促した。

「この前言ってもらったことをやりました。わたしもそれを言うために自分の気持ちを確かめられた。もうお腹の中にいる時点でわたしの子どもなんです。だから自分は産みたいって。旦那は経済的な理由で産むことを躊躇わせてしまう自分が情けないと言いました。両親は娘であるわたしの思うようにさせたいと、どんな判断にせよ賛成してやるって言いました。これは最初から分かっていたことなのに、ちゃんと言葉に出してもらおうと違う判断ができました。頼っていいんだって気持ちです。産みます。本当にありがとうございます」

佐也子は〈よかったね〉と娘さんのお腹を見ながら思った。自分の失敗が長い時間を経て誰かの役に立てたことがなにより嬉しかった。

居酒屋の仕事帰り、足が自然と公園に向かって行った。この前、奏の家から駅に向かっていくとき、自分も『あさひ食堂』のオーナーのように自分のやりたい事で人生を大転換できるのだと思つたのにそれから何も進んでいない。〈考える〉と人に言うなら佐也子自身も考えるべきだ。

前に座った川べりの石のベンチに座る。川向こうの高層マンションで灯りの点いた部屋を数えるともなく見渡した。こうして人が住むマンションや一軒家をみると、なんとこの世の中には多くの人がいるのだろうと思ってしまう。同じ時代を生きていても一度も会うことのないままこの世を去る人の方が圧倒的に多いのだと再認識する。自分の存在がどんな小さくなることで気持ち軽くなるのはよいことだと、これも石のおかげだと佐也子は思った。その延長として佐也子は自分のやりたい事は何かと考える。重圧もリスクも小さい自分にはないのだから。

高校の学園祭の模擬店で焼きそばを焼いているとき、自分は誰かを喜ばす為に料理を作

りたいと言ったことがあったのを思い出した。それは単に結婚して子どもや夫に作るのではなく、仕事として料理を作るのでもない。近頃よく耳にする子ども食堂とも違うのだ。いくら考えても「誰かを喜ばす」それしか浮かばない。

奏は本の中で自分の中に閃いたことに理由付けが出来なくても、迷わず進んできたと言っていたのを思い出した。物事はいくつか積みあがってから理由が見つかるものだからだと。佐也子はその閃きこそが石の声を聴くことなのだと、唐突に判った。

料理を作る人になるには技術やレパトリー、資格も必要になるかもしれない。早速、いくつかの目標が見えてきた。夜の居酒屋の店主にお願いしてみよう。そんなことを考えていると、ずつと鳴っていた虫の音が一斉にやんだ。公園の草むらからのそりと黒い塊がでてきた。佐也子の足元までくるとブルーの目をした黒猫だった。夜の中から現れた漆黒の姿にフランス映画の一ジャンルである「ノワール」と名前をつけて呼んでみた。すると「にや」と返事をしてその場でごろんと寝ころんだ。

7

奏は一年の内、半分以上は世界の巨石を取材しに巡っている。二年近く会っていないし、もう会わないのではないかと思っている。それは奏も同じみたいでお互いの生存確認はSNSの投稿で確認し合っている。佐也子は石に会いに行くことは続けているが、それと同じくらいに料理人が自分に定められた役目だと思えるようになっていた。

居酒屋の勤務年数が調理師免許の受験資格に達し、店主に証明してもらって受験した。無事一回で合格したがその勉強で料理とは胃袋を満たすだけではなく、人の命を預かる仕事なのだと自覚した。居酒屋の店主から店を出す料理のレシピは全部教えてもらったし、女将の紹介で知人が経営するチェーン店のセントラルキッチンで働かないかと誘われた。仕事の内容は各店舗の料理の仕込みだった。佐也子は料理で手を動かしているときに楽しくて仕方がない。それを機にホテルの客室清掃の会社を辞職した。

こうして料理の世界へ進んではいるが、まだ理由は見出せていない。機が熟していないのだろうと焦りはなかった。目標は目標、いまでできることはいまやる。そういうことだった。

夜の居酒屋の仕事を終えて家に帰ると、郵便受けに高校の同窓会の封筒が入っていた。五十歳になったとき始まった学年同窓会は五年ごとに開催されていた。今年は六十五歳になる年だった。佐也子は一度も参加したことがなかったが今年は参加しようかと思った。

返信用のハガキのほかに名簿も同封されていた。そこにはクラスごとに名前とメールアドレスが記載されている。佐也子のアドレスも載っていた。おそらく欠席の通知をするときにメールで送ったのが記録されたのだろう。名簿の名前には親友の名前もあったがメールアドレスはなかった。離婚したとき、厳しい言葉を投げかけられたきり連絡は途絶えてしまっていた。佐也子は彼女に会いたいと思った。

その親友からメールがきたのは三日後のことだった。会いたいと思った気持ちが親友に届いたとしか思えない。

親友は銀行に就職し職場結婚をした。子どもがひとり生まれたところまではやり取りがあった。果たして今はどうしているのだろうか、ドキドキしながらメールを開いた。なんと

彼女はフェルト作家になっていた。趣味が高じて本格的に勉強するためフィンランドに留学し向こうで住んでいると書かれていて二度びっくりした。きっかけは娘さんが料理人としてフィンランドに移住し結婚したからだそう。親友も離婚したのかと読み進めていくと彼女の夫は日本に残っているが結婚は継続しているらしい。

佐也子はすぐに返信した。とりあえず、自分は料理人の端くれとして仕事をしていると送った。すると、今でも子どもにも料理を作って喜ばせたいか？ と返信がきた。覚えていくれたのだと佐也子は泣きそうになった。そのメールはまだ続きがあった。

娘夫婦は小さなレストランを経営しているが、フィンランドは子育て支援の進んだ国で子どもに伝統的な料理を食べさせる食教育に協力しているのだそう。それで高校のときに佐也子が喜ばせる為に料理を作りたいと言っていたことを思い出したのだそう。

メールの最後にこっちに来てその仕事をしてみないかと書かれていた。

佐也子は親友の顔を思い浮かべた。彼女はもともと地黒なところにもってきて、テニス部で毎日練習をしていて一年中真っ黒だった。佐也子が彼女に付けたあだ名がノワールだったことも思い出した。すべては意味のある偶然の一致。佐也子はいつかの客室清掃で持ち帰った科学雑誌で興味深く読んだページを切り抜いて財布の中に入れていた。原因と結果は時間と空間を巡って伝播する。

今年もガレットに入れるフェーヴを作ってもらい、ガレットのフィユタージュを仕込んだ。ガレットデロワを切り分けたとき、その中にフェーヴが入っていた子の喜ぶ顔が目につく。佐也子はSNSに出来上がったスイーツを投稿した。奏からはすぐにへいね〜が付けられた。コメントに来月はそっちに行くので会いたいですと書かれてある。奏と会うのは十年ぶりだ。